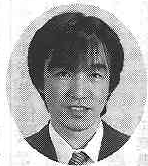


金子みすゞ いのちへのまなざし

鍋島直樹 龍谷大学文学部教授



鯨 (くじら) 法会 (ほうえ)

明治初期までは日本有数の捕鯨基地でもあった。捕鯨の際、近辺は活気づくとも、鯨の血で沿岸は赤く染まった。南の海に向かう鯨のお腹からは胎児が出てくるとも多かった。仙崎の中心街には浄土寺、浄土寺、西寛寺、極楽寺、普門寺など寺があり、亡くなった鯨たちの墓が一六九二年から、境内に建てられていた。鯨墓の正面には、「南無阿弥陀仏」の石碑が立ち、その下に「業証せしめん」と刻まれている。「鯨墓(国史跡指定)の田舎を参照してその刻文の意をさがすと、捕鯨としての生命は母種でもに終わらぬ、我々の手にあつて捕えられたが、我々の目的は、本来もまた胎児を捕るつもりはない。むしろ海中に逃がしてやりたいのだ。しかし、汝独りを海へ放つておつても、生きて得ないのである。母種を捕らぬ鯨の子等は、我々人間や天へ同じように、念仏回向の功德を受け、仏の悟りを得られるように願つて」という意図である。漁業は仙崎に住む人々を支える生業であるから、その僧侶は町の人々と共に仏に手を合わせ、漁獲した魚の命を用い、感謝して生きていくことを教えた。

村の漁師が羽織着て、浜のお寺へいそぐとき、浜のお寺で鳴る鐘が、ゆれて水面(みのも)をわたるとき、沖で鯨の子がひとり、その鳴る鐘をききながら、死んだ父さま、母さまを、こいし、こいしと泣いています。海のおもてを、鐘の音は、海のとこまで、ひびくやら。

金子みすゞは、自分たちの喜びとは対極にある他者の悲しみを感じ取っている。幸せを喜んで人のすそをば、独りぼっちで悲しんでいるものたちがいる。多くの命を頂いて、私が生かされている。だからこそ、相手の身になつて、自分自身をかりかえることが大事であることを、この詩が教えてくれる。金子みすゞの詩に感じる深い優しさは、存在の孤独を救済することを知らずにはなつて生きているのだと思う。また、自己中心的なものを見つめ、世界に転換のめざす詩がある。

星に星を見えないなら、夜空の星はいっそう輝いて感じる。タンポポは冬に姿が見えないから、春に桜の下で咲く小さなタンポポを見つけたと元気づけられる。愛情や優しさで眼に見えないことも、人に元気を与えるように、眼に見えないものも大切なきこの詩は教えたい。金子みすゞの詩を、大震災で大切な人を失った方々に紹介した時、被災地の方々それぞれに感じて、涙を流していた。私が出会った行方不明者の家族は、どれだけ時を待たうとも、その人の帰りを待っている。愛する人が帰ってきてほしいという家族の気持ちに込める教養が、浄土教に伝えられている。世親や曇鸞が明らかにした廻相回向の教養である。廻相回向とは、人が亡くなって浄土に生まれたいと願う、再びこの世界に還つて、縁ある人々を迷いから悟りに導くという教養である。この廻相回向とは、死を超えてつづく大いなる慈悲、仏の働きを表わしている。眼に届かなくても大切なものがあつてこそ救済されたものに親鸞聖人の言葉がある。

「煩悩に眼をささぎられて、仏を見ることができなくても、如来の大慈悲は捨つておきたくも私を照らしている」という文意である。思ひ悩む私が大慈悲にいだかれて、私の眼には見えなくても仏に照らし護られている。そういう安心がそこに示されている。こうした教養を依りどころにして、被災地の遺族に、次のような言葉を色紙に書いて贈った。「愛する人は教えとなつて、合わす手に通つてくれ」。どれも誰かを愛していても、いづか別れる。しかし、死別した後で、その人なごの世に存在していた姿がのこされた人たちの心に蘇る。自分自身の心に溢れる愛情がある。お墓やお仏壇にお供えする花が、手を合わせる自分自身を慰めるよう感じることもある。夜空に浮かぶ月が、闇に閉ざされた自分自身を見守ってくれることがある。人は「くまなくその姿形が覚えなへん、何もなくなつてしまふ。それは誰かにならうかもしれない。しかし、その人から受けた愛情、その人にささぎた愛情を忘れないでいることができるのは、今ここに生きている自分自身だけでないだろうか。私の流した涙が、幸せの種に注ぐことができれば、いつかまた新しい花を咲かせるところになるだろう。」

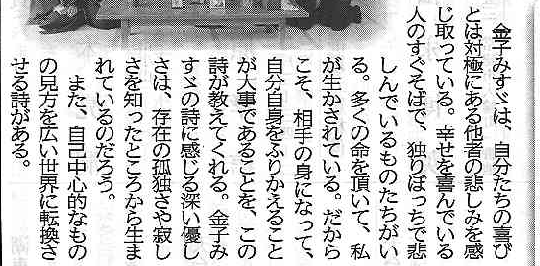
金子みすゞの「こたまでしようか」「明るい方へ」「私と小鳥と鈴とな」などの詩が、子どもたちの心に生き抜く勇気を与えている。さびしいからこそ互いにたすましあおう。葉っぱが光に向かって広がるように、明るい方に向かって生きて抜いていく。そう金子みすゞは、私に語りかけている。

星とたんぽぽ
青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜のくるまで沈(しず)んでる、
星のお星は眼(め)に見えぬ
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。



金子みすゞ(一九〇三〜一九三〇)本名しんは、矢崎節夫「重譜」詩人金子みすゞの生涯』によると、一九〇三年(明治三〇)四月十一日、山口県大津郡仙崎村(現在の長門市仙崎)に生まれた。父はみすゞの三歳の時に亡くなり、下関の上山文英堂の後継で、金子家は仙崎でただ一つの書店、金子みすゞ文英堂を始めた。みすゞの弟正祐は一歳の頃、上山松蔵の養子となり、下関にもわけていった。一九二三年(大正二二)みすゞは下関随一の書店上山文英堂の支店で働き始めた。仕事のかたわらペンネーム「みすゞ」で重譜を書き、投稿した。それらの詩はみすゞが二十歳の時、雑誌『重譜』の誌上(西條八千代に認められ、若狭重譜詩人たちの僅れのみでなつていった)やが結婚し、一人娘がさへに思われた。しかし、みすゞは夫から詩作を禁じられ、病気が重くなり、辛い生活ののち離婚した。娘のまゆを引継ぎ難そうとする天に抗い、三種の遺書を残して一九三〇年(昭和五)三月十日、二六歳の短い生涯を閉じた。みすゞが命をかけて守った娘まゆさは、みすゞの母の子の養女となり、心豊かに育てられた。金子みすゞの心は、娘のまゆさや孫たちに受け継がれている。

いつの時代の人とも、幸せでもに困難や苦しを感じている。世間は賑わっているその一方で、せつない想いをしているものたちがいる。金子みすゞの作品には、幸せな光景とともに、かわいそう「まゆさ」といった言葉が同時に散りまわされている。みすゞの「大漁」「お魚」「法会」の詩は胸に迫る。



金子みすゞの生誕地を訪れた仙崎は、日本海に面した漁師町でもある。

浄土真宗 新 仏事のイロハ 630円 末本弘然

「お仏壇のお飾りの仕方」「お焼香の作法」「念珠の持ち方」など、基本的な仏事作法を写真やイラストを使って詳しく紹介。また「戒名ではなく法名」「位牌は用いない!」などの理由を浄土真宗の教えから解説。さらに「お仏壇やお墓の後継者がいない!」「葬儀必要?」など現代の悩みに熟練僧侶がズバリ答える。

浄土真宗 仏事のイロハ 本末弘然 著

45分収録の「仏事のイロハ」がリニューアル!

浄土真宗 仏事のイロハ 本末弘然 著

45分収録の「仏事のイロハ」がリニューアル!

浄土真宗 浄土真宗 浄土真宗 浄土真宗

やさしい真宗講座 一み教えに生きる一 霊山勝海著 新書判/258頁 735円

正信偈入門 一浄土真宗を基礎から学ぶ一 三木照國著 新書判/128頁 525円

永く読み継がれるには理由がある 世の中が移り変わっても、人が人である限り、変わらない苦悩がある。だからこそ、永く人びとに読み継がれてきた名著には、この苦悩に込める真実の響きがある。 本願寺出版社 新書シリーズ

装いもあらたに新書版でリニューアル発行

本願寺出版社 0120-464-583 075-341-7753

〒600-8501 京都市下京区堀川通七郎町下(本願寺) http://hongwanji-shuppar.com/

定価税別(税込)3,000円以上(無料) 価格はすべて税別